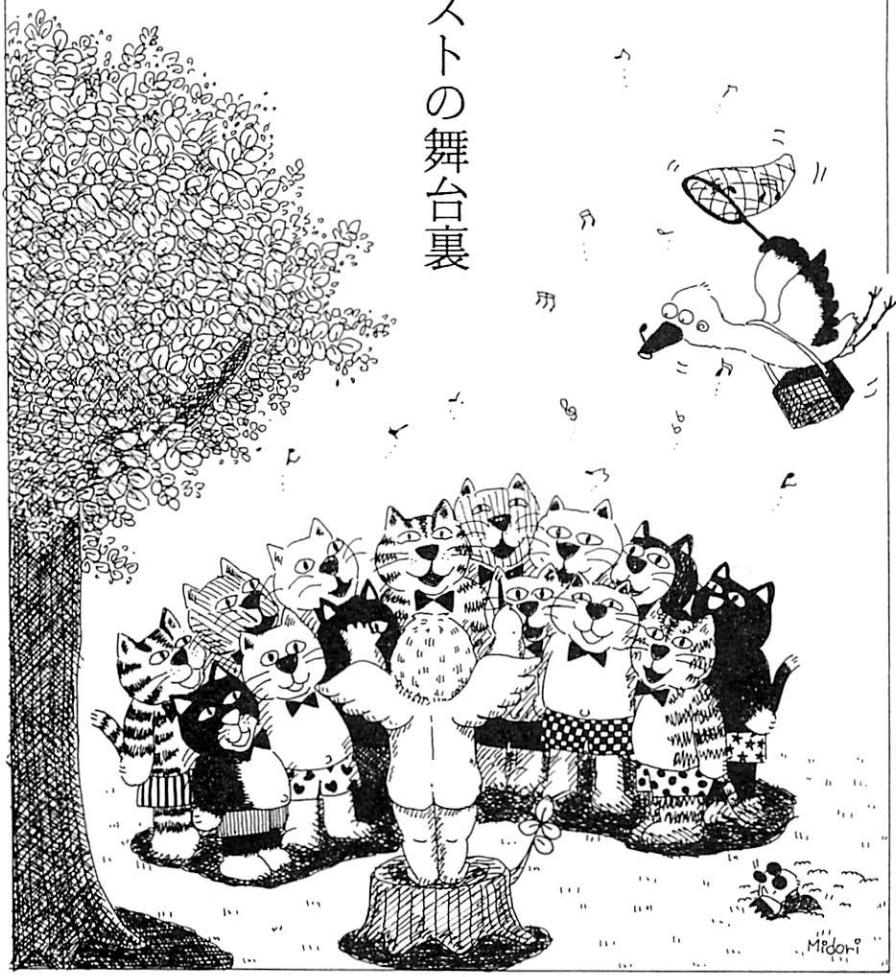


# アーティストの舞台裏



## 旅芸人

交通機関の発達に伴つて、演奏家の活動範囲も驚異的に広がつた。その昔、神童モーツアルトはもとより、演奏旅行に追われ続けた鬼才ヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニや、超絶技巧を誇つたピアニスト、フランツ・リストが馬車に何日も揺られて行つた道程が、現在ではちょっと飛行機に乗りさえすれば事足りてしまう。

このように世界を股にかけて活躍できる演奏家の数は、「自称アーティスト」全体の数からみればごく一握りではある。超一流のアーティストの中には、演奏活動に関してその望みのほとんど全部をかなえてもらえる幸せな人が、ごく少数ながら存在するのも事実ではあるが、これは例外中の例外である。世界のメトロポリスを駆け巡つて演奏活動を続ける演奏家の姿は、はたから見ていてこそ華やかな、憧れの的ではあるが、その裏にはそれなりの労苦が秘められており、演奏家本人は自分の置かれている状況をそう幸福には感じていない場合も多い。

やはり何といつてもつらいのは、長期間家族と離れて暮らさなければならない、という現実である。たまに自宅に戻った時ぐらいは家族や子供の相手をしたくとも、不在中に山と溜まった手紙の返信などに追われているうちに、また出発の日が迫つてくる。

売れっ子演奏家がこなすコンサートの数は年間百回をゆうに越え、人によってはその倍程の仕事を消化してしまうケースもある。仕事は何もコンサートばかりではなく、各種の録音や録画なども入るわけで、これらはコンサートスケジュールの隙間に容赦なく割り込んでくる。

仕事の上で訪れた街の数こそ多くとも、知っているのはホテルとコンサート会場だけ、という場合が多い。それもホテルの部屋などは連日のように変わるので、夜中にふと目が覚めた時などよく考えてからでないと、

ベッドを降りるつもりだったのに壁におでこをぶつけたり、バスルームに行くつもりがクロゼットの扉を開けてしまったりする。

観光をしたくとも、やはり演奏会当日は夜のステージに向けてのコンディション調整が大切で、そう浮かれてばかりもいられない。会場でのリハーサルに出かけなくてはならない事も多い。

コンサートがやっと終わると、翌日の朝は時間の許す限り休んだ後、荷物をまとめて空港なり駅なりに急ぐ、というパターンがほとんどである。コンサートの数が多い、という事は当然プログラムの種類も多いわけで、たまにフリーの日があってもどこかに練習場を探し求め、差し当たっての曲目以外のプログラムの準備に追われる事にもなる。

旅程が立て込んでくると切実なのは衣服の洗濯である。一ヵ所に数日間逗留できる場合にはホテルのクリーニングサービスに出せるのだが、スケジュールによつては洗濯物を預けても出発までに受け取れない場合がある。

そんな時、つい先程のコンサートの疲れと興奮から覚めやらぬ丑三つ時に「明日の朝までに乾いてくれるかなあ：」などと思案しながらバスルームでパンツや靴下を洗うのは、旅行中の演奏家なら誰でもやつている事とはいえ、わびしいものである。

舞台用のワイシャツなどは演奏中にすぐ汗まみれになるので、ワニステージに最低二枚は必要、という人もいるし、旅行中にはその絶対数に限りのあるワイシャツのローテーションをうまく処理するのも、ひとつのが才能であろう。下着については最近日本で「紙製の使い捨てパンツとシャツ」というのが販売されるようになり、旅行中に限つてはこれを愛用する人もしてきた。一回や二回の洗濯にも耐える、という便利なもの。女性用もある。

ヨーロッパからアメリカ、そして日本へ、などと時差のある土地に移動するのも、大きなストレスとなる。

時差調整の秘訣は人によつてさまざまだが、飛行機の中では寝られるだけ寝て、次にいつ眠るべきかは次的目的地に到着してからそここの時間に合わせて考え直す、という人が一番多いようである。着いた土地の現地時間が朝だつたら夜まで起きているし、夜だつたら睡眠薬を飲んでもう一回寝てしまう、というわけだ。

日本から初めて海外を訪れた旅行者のように「ええと、ここで九時という事は、本当は×時の事だから…」などと換算を続けていると頭が混乱してくる。日中に昼寝をして疲れをとつて、というのは夜眠れなくなる原因となり、かえつて收拾のつかぬ羽目に陥る事が多い。

時差でつらいのは単に眠い、とか、夜眠れない、などという事だけではない。眠気ぐらゐはステージに上がれば吹つとんでしまうが、怖いのは演奏中に何の前ぶれもなく突如として集中力が散漫になつてしまふ時である。

多くの場合は慣れからくる反射神経に頼りながら演奏そのものは継続できるが、目の前で自分の指が現在演奏中のこの作品の続きをどうなつてゐるのか、どう弾き進んでいくと曲の終わりに行き着くものか突然思考できなくなる、というブツツン状態も、振り返つてみれば背筋の寒くなるような恐ろしい話である。

しかし良くしたもので、こういった時差ボケの際には恐怖感そのものまで麻痺している事が多く、「おや、困つたな」とまるで他人事のように思つても、幸いに心臓が止まりそうにまではならない。

時間のずれで困惑するのは、何も時差ばかりではない。国によつてコンサートの開演時間がまちまちなもの、演奏家にとつては不便なものである。

ウイーンでは夜七時半に始まるのが通例である。コンサートが終了し、楽屋で荷物をまとめる十時前後、それからでもまだ充分夕食をする事ができる。

しかしたとえばスペインのように、開演が夜九時とか九時半、運が悪いと十時から、などというケースもある。聴衆はゆっくり食事を済ませてからコンサートを楽しめるので良い接配だが、演奏する側はそれまで

待機しているだけでもつらい。

コンサート直前にはあまり食欲もわかないものだし、無理して食べて胃にばかり血液が集まつても演奏のさまたげになる。だからといってすこし早目、夕方六時頃に軽食をとっておこう、と思っても、スペインと/or>いう国にはその時間帯に開いているレストランがない。終演後に地元の事情に詳しい知人や公演の主催者など連れ立って食事に行けるのならばともかく、そうでないとホテルに荷物を置いてから、さて、と思っても、今度は時間が遅すぎるために食いはぐれてしまう危険性が大きい。

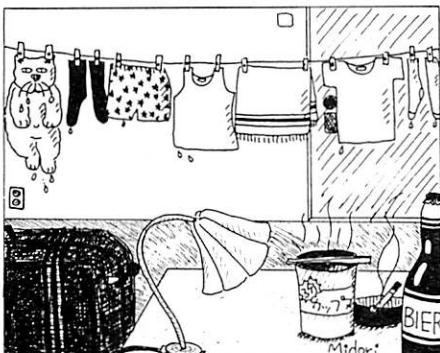
たとえ普通の時間のコンサートであっても、それが共産圏や小さな田舎町だったりすると、まだそれ程遅くないにもかかわらずどの店もすでにシャッターが降りてしまっていて、何も食べられなくなる事はしょっちゅうである。

そんな時に威力を發揮するのがカップヌードル。持ち歩くのにかさばるという短所はあるにせよ、少なくとも日本人アーティストにとっては天の助けとなる。

ピアニストの宿命ではあるが、演奏するたびに楽器が違う、というのも考えてみれば不便な話である。

ピアノという楽器は見た目には同じように黒くても、それぞれの弾き心地に雲泥の差がある。重くて腕や肩が痛くなりそうなタッチの楽器、鍵盤が軽すぎて抵抗がなさすぎるためのかえって指がもつれそうになってしまふ楽器、音色や音量、そして全体のバランス等々、ひとつとして同じフィーリングの楽器は存在しないと言つても過言ではない。

今日世界のコンサートホールで一番多く使用されている楽器は、やはり西



ドイツのスタインウェイ社のものであろう。当地オーストリアではさすがに自国製ベーゼンドルファー社の楽器が多い。日本ではスタインウェイに並び、ヤマハの楽器も高い頻度で使用されている。アメリカに行けばアメリカン・スタインウェイ（西ドイツのものと名前は同じでも仕様が全く違う）やボールドウインその他アメリカ製の楽器が多い。みな一台数百万円から一千万円前後もする高価なピアノである。

それにキャラクターのある楽器もあり、よく「どのメーカーの楽器が一番好きですか」との質問を受けるが、こればかりは一概には答えられない難問である。

個々のピアノのフィーリングの違いを説明するのに比較的分かりやすい例は自動車だろう。値段も似たようなものである。

ドイツ、フランス、イタリア、日本、アメリカなどで生産された最高級車、国の元首や国賓らが使用するモデルを並べて、さあどれを選びますか、と聞かれても即答できない。どの車もタイヤは四つ、ハンドルがあってアクセルを踏めば走るしブレーキを踏めば止まる。しかしその味わいと乗り心地の善し悪しは全く個人の趣味に属する問題であって、優劣の次元の話ではない。柔らかめのシートを愛する人もいれば、多少堅めの方が疲れなくて良い、という人もいる。乗り心地は二の次であって車は速ければ速いほどよろしい、というのもひとつの哲学だ。しかし大きい車でも軽自動車でも百キロの道程を時速百キロで走れば一時間である。それがたとえ新車であっても、一千万円の車と八十万円の車とではどこかが違うのは容易に御想像戴けるだろう。

ピアノも同じである。特別のモデルを除いてはどれも同じ数、八十八の鍵盤を装備し、アクション関係も多少の差は見受けられるものの一応の国際規格を基準にして作られているし、一本ないし三本あるペダルの機能も皆同じである。グランドピアノでもアップライトピアノでも、同じ場所のキーを叩けば同じ高さの音

が出る。

それでも弾き心地が微妙に違う。アクセルを踏んだ時の反応が車によって違うのと同様に、鍵盤を押した瞬間の音の伸びが違う。「違う」ぐらいならまだ許せるが、全然伸びない場合もある。それでもそこから最大限の可能性を引き出すのがプロに課された課題であり、「楽器の具合が悪かったので、今日は満足のいく演奏ができませんでした」との言いわけは許されない厳しい世界である。

しかしどんなに優れた性能を約束されていようと、調整が悪ければ元も子もないのもピアノ、車、双方の共通点である。

それだったら他の楽器のプレイヤーみたいに自分専用の楽器をどこへでも持ち歩いたらいでないか、というアイデアは誰にでもひらめくだろう。実際にそれを実行しているピアニストもいる。

しかし自分専用のピアノを常に持ち歩く、というのは莫大な運搬費がかかる上、スーツケースひとつで身軽に移動できるピアニストの行動に合わせて楽器の移動をアレンジするのは、至難の技である。ヨーロッパ内のように地続きの所はトラックで運搬するが、単に移動に時間がかかるだけではなく、国境通過のたびにある税関審査でのロス時間も馬鹿にならない。

そしてもうひとつ。物は同じでも入れる会場によって弾き心地と音色とが信じられない程変わるものだ。一見丈夫そうには見えるが、ほとんどの部分が木で精巧に作られており、新しい会場に入れててもそこの空気に馴染むまでにかなりの時間を要する。ましてや厳冬のさなかのツアーノどではトラック内部、外気、そして会場など、楽器に触れる空気の温度や湿度がいつも極端に違う上、公演中にはかなりの熱を持ったスポットライトが直射される。

このような条件の下ではいくら自分の好みに合わせて最高の状態にまで調整を行った楽器であっても、まったく冴えない音しか出なくなってしまう。まるでピアノが風邪をひいたようなものである。雨が降っても、

晴れても、その湿度の変動がピアノに影響を及ぼすまでに、およそ三日かかるという。それだけのんびりしているものを分刻みで変化する状況の下でひっぱりまわせば、調子が狂わない方がおかしい、という事にもなろう。

日本からヨーロッパに演奏旅行に来るオーケストラの団員、特に弦楽器の団員は、こちらに来て数日すると「文化と伝統の薫るヨーロッパの空気を我が胸に吸い込んだ、という事に刺激され、自分の奥底に隠されていた真の実力がとうとう日の目を見るに至ったか！」と有頂天になるのだそうだ。自分の楽器から面白いようく良い音が流れ出してくれるからである。腕が上がった、奥義を会得した、と思いたくなる。

しかしこれも種を明かせば、湿度のなせる技である。日本はやはりそれだけ湿度の高い国なのだ。  
逆に日本から琴や尺八を持参する邦楽の演奏団体の場合には、楽器の置き場と管理によほど気をつけないと桐や竹でできた胴がすぐひび割れてしまう。特に暖房で空気が乾燥している冬場が鬼門である。ケースの中にサラダ菜を入れたり、寒くとも楽器のためには部屋の暖房を切る、などそれに苦労はつきないようである。

それだけの苦労や不平があつても演奏活動をやりたい、続けたいと思うのには、何か特別な理由もあるのだろうか。

それは演奏する、という行為そのものの持つ魅力よりも、ある種の極限状態に置かれ、その中で自分が持っていると信ずる可能性のすべてを傾けてベストをつくし、それが聴衆に評価された時の喜び。それこそ身体を張って最大限の集中と緊張とを生み出したあとの解放感。これらがいわば麻薬のような効果をもたらして、アーティストを呪縛するのである。

開演前には「もうごめんだ、こんな割りの合わない事は今晚限りで絶対やめよう」と真剣に思っても、終

演後には「もう一回やってみようか」と思いなおしてしまって、不思議な稼業である。

## デビューまで

昔から、クラシック音楽を本業とし、演奏活動によって財産を築きつつ樂々と暮らす、というのはなかなか難しいようである。現代のようなジャーナリズムとコマーシャリズムの発達した世の中でこそ、一回の演奏会のギャランティーが数百万円という商売が成り立つてはいるが、実際にクラシック音楽の世界で百万円単位のお金をコンサートのみの報酬として稼ぎ出せる演奏家の数は、おそらく非常に限られた数でしかないだろう。もっとも演奏に放送や録音の権利がからんだ場合はこの限りではない。「ワンステージ数十万円」の演奏家は珍しくなく、ふだん我々がコンサートなどでその演奏に接しているわけだが、その数も全世界の演奏人口からみれば果たして何パーセントといえるだろうか。

「オーケストラで弾いてるヴァイオリニストは弓を上下させるたびに一円、二円、三円…、て思うんだってさ。ピアニストは和音を弾くたびに十円、二十円、三十円…、指揮者は腕を動かすたびに一万円、二万円、三万円…というわけ。それを見ていたテノール歌手がヒヤークマーンエーン、と歌ってんの聞いたら、アホらしくなっちゃった」などという冗談がある。

これはさておき、演奏家をジャンル別にみて、時間あたりの単価が一番高価なのは、主役級のオペラ歌手のようである。しかし歌い手はそれこそ「身体を張って」自分の肉体そのものを酷使しながら活躍しているとも言える。変声期を過ぎてみないと海のものとも山のものともわからず、その後実際に現役として活動で